

学徒出陣五十周年にあたっての声明

## わたしみの「えは今なにを求めるか

日本戦没学生記念会 出陣学徒有志一同

1943年(昭和18年)、太平洋戦争はいよいよ苛烈で、まさに国家存亡のとき、学生もペンを捨てて入隊せよという昭和天皇の命令で、いわゆる第一次学徒出陣が行われてから、本年1993年はまさに半世紀目に当たります。

全国の旧制大学、高等学校、専門学校、専門学校の学生生徒で、20歳に達して徴兵猶予の特典を与えられていた男子は、直接に戦争に役立つ学問をしていると考えられた理科系や教育系を除いて、文科系(法文経)全員が徴兵猶予を停止され、学業半ばで陸海空の軍人として召集されました。まさに近代日本の高等教育史の断絶といつ未曾有の重大事態に立ち至ったのです。

緒戦の勝利は、一部の反対論・懐疑論を押しつぶして国民的狂喜を以て迎えられました。その後、政府の徹底的報道管制によって捷報ばかり喧伝されるにも拘らず、ガダルカナル島の「転進」(敗退とはいわない)、アッツ島の「玉砕」以降、連合軍の反攻が次第に本土に迫って来たことを、国民も若い学生も実感するようになっていきました。

日中戦争の泥沼から東亜各地への進攻(侵略とはいわない)作戦は、東洋平和といつ名目を掲げ、西側諸国の抑圧からアジアを解放し、日本とともに共存共栄の道を歩もうというものでありました。開戦の翌年から既に連合軍の反撃ははじまり、占領各国からの敗退、本土危うしの危惧の中で学徒出陣が、あらひと神、天皇によって命じられたのです。「国家が危ない。民族存亡のとき。」「明治以来の国家教育、思想の徹底的とりしまり、国際的情報からの遮断、死を恐れることを恥とする青年の客気、天皇制や国家体制への批判もとざされて久しい社会の空気、それらの中で、学徒は悲壮な思いで、幾多の懐疑と不安を胸に、多くは黙々と、国家や同胞のために己れを捧げなければならぬ」と言い聞かせながら、専門をくぐったのでした。少なくともこの戦争で死ぬのはわれわれの世代だけにとどめたいと念願し、学生の特典をもたない同世代の友人知己がわれわれに先立って戦死していく当時の現実、に耐えがたい思いを秘めていたのです。親兄弟、愛する人たち、敬愛する教師や友人たちとの別離、人間らしい生活が根こそぎ奪いとられる絶望感が、行く者にも送

る者にもどんなにいいものであったかは、言いつまでもありません。

1944年、45年へと、戦争は敗戦に向けてころげ落ちる石のようにな。悲劇の歴史をたどりました。後に続く学生も次々に召集され、国民一般も体さえ使えるなら、老いも若きも女性も子どもも、戦場に工場にかりたてられました。多くの者が死に傷つき、また広く、東南アジア、太平洋一帯で多くの者を殺し傷つけました。被害者であり、また加害者でもあった戦争体験です。

いくさで死んだ学生が、遺書として、「わだつみのこえ」を残しました。

生き残った出陣学徒、遺族、歴史を学び戦後半世紀近い日本の歴史を眺めてきた者たちにとって、戦後日本は何だったのでしょうか。

敗戦といつ日本歴史上例を見ない大きな衝撃の中から、生きる日々の中に必死になりながらも、戦争には絶対反対の姿勢を守り、平和で心豊かな文化国家をつくる。これがまさに日本の戦後の生き方の原点であり、日本国憲法が広く支持された理由でした。

戦力は一切保持しない。たとえ自衛のためであっても、戦争には手を出さない。これまでの世界の戦争は、「いつとなく自衛のため」といつとを理由にしているではないかと、堂々ととなえたのは、保守党の最高指導者でした。朝鮮戦争で警察予備隊が作られたが、これは軍隊ではないと称し、いつのまにか、名前は保安隊から遂に自衛隊に転化します。世界も、いや、日本人でさえ、今では自衛隊は当然軍隊だと考えています。はじめは戦車ですら「特車」と呼びながら増強をつけ、陸海空軍の戦力は現在まさに世界の最新鋭装備となっています。そのくせ、政府や権力者たちは戦争責任や戦後補償の問題にほとんど類かぶりのままです。

対岸の朝鮮戦争、その後のベトナム戦争の後方基地として、「特需」は日本の経済をよみがえらせ、国民のふところを貧しさから開放し、今日の経済発展の基礎をつくりあげました。戦争はいやだが、他国の戦争で多くの人たちが殺し殺されるのは黙認します。核兵器は持たないし、米軍にも持ちこませないと、政府は終始一貫して約束していますが、これも嘘であり、こまかしてあることは日本国民はよく知っています。

自衛隊は国の自衛のためで、北の脅威に対処するというのが、長い間の政府の言明でした。にもかかわらず、絶対に海外派遣はあり得ないという固い公約は、冷戦

終結後の今に至って、またしても平然と破棄されました。カンボジアの派兵は平和再建のためで、国連の要請による、過去の戦争とは違つて、あくまで東洋平和のためとして、若い自衛隊員は硝煙消えやらぬ現地に派兵されました。すべてが虚偽の連続であり、真実の隠蔽であつて、これで真の国際信頼が得られ、国際貢献が果たされるといつののでしょうか。今年に入つて「皇室外交」の新たな展開も、この歩調にあわせた足どりとはいえないででしょうか。

湾岸戦争への支援、後方基地の役割も記憶に新しいことでした。一方的に正義の戦争といつものがあり得るのか。「平和」や「人道」を名目とする戦争が許されて、われひと共に殺し殺され、生命も心も傷つけ合つていくのがくり返されていいのか。特に前途に輝かしい可能性を持っている若者が、国家の権威によって命令され、或は勸奨されて、国権の発動たる戦争はもちろんのこと、武力による威嚇や武力の行使に加わることは絶対に見過すことはならないと思います。

学徒出陣から 50 年目の現在、再び「派兵時代」に突入したことは、戦後の歴史の大きな転換点に立ったことだと考えられます。すでに自衛隊員で大学一部在学中の若者たちがやむなく学業を捨てて派兵の道を選ばざるをえませんでした。国家の指導者が、世界平和のため、国家のためといつて名目で、これからの若者たちに命を捧げることを奨励し、他国の武力紛争に加担することを当然とする方向に日本を向けることがこのまま黙認されてよいのか。自衛隊員の残した留守家族の悲しみと憂慮はまさに戦前の出征兵士と「銃後」の姿の再現にはかならず、私たちは前線の隊員たちに「早く還つて」と叫ばずにはいられません。

かつてのあの戦争で死んで行つた若者たちに対し、真の平和に徹する日本でなくて、私たちは何と申し開きしたらよいのですか。もし彼らが生き残っていたならば、彼らが知り得なかつた多くのことを世界から学び、二度と戦争に加担してはならないと今も叫び続け、私どもを叱咤激励して、ともに立ち上がってくれたであらうと私どもは信じています。

生き残つたことによつて戦争に対する反省と批判を学んだ私どもは、かつて戦争抑止に立ち上がれなかつた悔いを今度こそ国民に語りかけ、国民的運動を展開しなければならぬと念願し、とりわけ戦争を知らない若い世代の諸兄弟姉妹に対して強く訴えるものであります。

1993年2月5日

日本戦没学生記念会(わだつみ会)出陣学徒有志一同

大塚 雅彦

小澤 一彦

熊谷 直孝

久米 茂

神津 直次

故後藤 弘

故鈴木 均

高畠 平

故平井 啓之

星野安三郎

山下 肇

(五十音順)